

[記事]

学会誌の編集方針

神沼靖子

はじめに

ISSJ ジャーナル (JISSJ) は、5 年目を迎えました。毎年 1 巻ずつ発行していますので、今期は第 5 巻目になりました。第 1 巻から第 3 巻までは投稿も少なく、1 巻あたり 1 号を発行するのが精一杯でした。第 4 巻で初めて 1 号と 2 号を発行することができ、投稿数も急速に伸びています。それは、本ジャーナルが認知され始めた証といえます。

JISSJ はオンラインジャーナルですから、投稿はいつでも可能です。査読を経て編集委員会が採否を判定し、採録が決まった段階で随時掲載となります。論文誌投稿規程にはいくつかのルールが示されています。その中で、今回は二つの項目に注目してみたいと思います。

JISSJ の著作権

一つは著作権に関することですが、投稿規程には「本学会に投稿される論文等に関する国内外の一切の著作権（日本国著作権法第 21 条から第 28 条までに規定するすべての権利）は本学会に最終原稿が投稿された時点から原則として本学会に帰属する。ただし、特別な事情により、著作権の譲渡を承諾できない場合、または一部制約がある場合は、最終原稿を投稿する時点で、その旨を書面にて申し出る。」と記されています。掲載後にトラブルに発展することがないように、留意してください。

長編論文の受入れ

二つ目は、論文の長さに関することです。投稿規程には「原則として掲載形式で論文及び事例報告論文 8 ページ、小論文 4 ページ、サーベイ論文 16 ページとする。学会誌への掲載形

式は、A4 版横書き、2 段組とし、文字サイズは 10.5 ポイントを標準とする。1 行あたり 20 字、1 段 40 行として 1 ページあたりの文字数は 1,600 字となる。掲載形式のページ数は、図、表を含めて計算する。」という記述があります。ただし、編集委員会では、非技術系からしばしば求められる長編論文を受け付けてよいであろうと話合っています。それは、情報システム論文には技術的なアプローチと人間・組織・社会の視点からのアプローチとがあり、人間活動系から情報技術系まで広い範囲をカバーしているからです。幸い、JISSJ は冊子体ではなくオンラインジャーナルとして刊行されることから、論文の長さをそれほど厳格に規制しなくてもよいのです。

質の維持

ジャーナルは学会の顔です。したがって、JISSJ は質的に高いレベルを維持することが重要です。論文の質は、有用性、新奇性および信頼性の視点で評価されます。

これまでの投稿原稿をみる限りでは、日本語文章の推敲不足（誤字・脱字や日本語として意味の不明な文）が目立っています。これが採択率低下の大きな要因になっていると考えていでしょう。情報システムの構築では、顧客と開発者の双方で情報システムの内容を正確に共有することが不可欠であるといわれていますが、論文でも同じことがいえます。つまり、研究成果を読者にわかりやすく伝えるために論文構成と文章表現にもっと気配りをして欲しいと願っています。

査読に向けて

論文の質を保つために、投稿された論文は査読というプロセスを経ることになります。査読は、編集委員の他に、会員の有無を問わず匿名の大勢の査読者の無償の協力によって成り立っています。論文と査読者のミスマッチを無

Yasuko Kaminuma

学会誌編集委員

[記事] 2009 年 6 月 2 日受付

© 情報システム学会

くすために、投稿の際に、論文のジャンル、研究方法論やキーワードを明記しておくことを推奨します。査読者は上に述べた質の視点のほかに、①先行研究との関係が明瞭に述べられているか、②評価・考察は妥当か、などにも注目しています。投稿前に、これらの視点を満たしているのかについても是非確認してください。

査読者へ

査読者の皆様には、大変お世話になっております。短い査読期間のなかで迅速かつ丁寧、公平な査読をしていただいていることにこのページを借りて深謝いたします。

ただし、少しだけお願いがあります。ごく稀ですが、執筆者が査読条件を取り違えるケースが発生していますので、査読条件は分かりやすく述べてください。また、査読者の価値観を執筆者に押し付けることがないように、くれぐれもご注意ください。

終わりに

情報システムは社会の進展とともに変化し複雑化しています。そして、ますます重要性を増しています。それは、情報システム研究の対象も多様化していることを意味しています。社

会生活、組織活動の安心・安全のために、情報システムに高い信頼性が求められるようになった今日、情報システム学会が社会の要請に応えることは極めて重要なことです。

情報システム論文は情報システムを取り巻く課題とその解決のための知見を蓄積し継承するための一手段であると考えています。つまり、既存の研究成果を実社会に適用して問題解決をするとともに、このプロセスを通して得られた知見を基に研究的側面で分析・評価し、新たな研究成果として還元し広く社会に貢献することになります。この繰り返しが実務と研究を橋渡しするプロセスとして重要であると考えています。

編集委員一同、皆様からのご投稿をお待ち申しております。

著者略歴（神沼靖子）

1961 東京理科大学理学部数学科卒。日本鋼管、横浜国大、埼玉大学、帝京技術科学大学等を経て、2003 前橋工科大学教授を定年退職。博士（学術）。2005-2008 年度：情報システム学会理事。2005 年より編集委員。2007-2008 年度：編集委員長。